

## 4 行列の簡約化

**定義 1.** 行列の零ベクトルでない行の0でない左から最初の成分はその行の**主成分** (pivot) と呼ばれる。

**例 2.** 次の行列  $A$  の第1行の主成分は3、第2行の主成分は1、第4行の主成分は2である。第3行は零ベクトルなので、主成分はない。

$$A = \begin{pmatrix} 0 & 3 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 3 & 2 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 1 \end{pmatrix}$$

**定義 3.** 次の性質を満たす行列は**簡約な行列** (reduced row echelon matrix) と呼ばれる。

- (I) 行ベクトルのうちに零ベクトルがあれば、それ以下の行ベクトルも零ベクトルである。
- (II) 零ベクトルでない行ベクトルの主成分は1である。
- (III) 第  $i$  行の主成分を  $a_{ij_i}$  とすると、 $j_1 < j_2 < j_3 < \dots$  となる。
- (IV) 各行の主成分を含む列の他の成分は全て0である。

**例 4.** (簡約な行列の例)

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 0 & 7 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$
$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -1 & 3 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

**例 5.** (簡約でない行列の例)

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 2 & -1 & 3 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

**定理 6.** 任意の行列  $A$  は、行基本変形を繰り返すことにより簡約化できる。また、簡約化した行列  $B$  は、行基本変形の方法によらず一意である。

**証明.** 教科書をご覧ください。

□

**例 7.** 例 2 で考えた行列  $A$  を簡約化する。

$$\begin{aligned}
 A &= \begin{pmatrix} 0 & 3 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 3 & 2 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 1 \end{pmatrix} \\
 &\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 & \frac{1}{3} \\ 1 & 0 & 3 & 2 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & \frac{1}{2} \end{pmatrix} \quad \text{①} \times (1/3) \\
 &\begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 2 & 4 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & \frac{1}{3} \\ 0 & 0 & 0 & 1 & \frac{1}{2} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad \begin{array}{l} \text{① と ② を入れ替えた} \\ \text{③ と ④ を入れ替えた} \end{array} \\
 B &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 0 & 3 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & \frac{1}{3} \\ 0 & 0 & 0 & 1 & \frac{1}{2} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad \text{①} + \text{③} \times (-2)
 \end{aligned}$$

**定義 8.**  $A$  を簡約化した行列  $B$  の主成分の個数は、 $A$  の階数とよばれ、 $\text{rank}(A)$  と書かれる。

**注 9.** 必ずしも簡約でない行列  $A$  の主成分の個数は、 $\text{rank}(A)$  以上である。

**例 10.** 例 4 における行列の階数を計算する。

$$\text{rank} \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 0 & 7 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} = 2, \quad \text{rank} \begin{pmatrix} 0 & 1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = 3$$

$$\text{rank} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -1 & 3 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix} = 3, \quad \text{rank} \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = 3$$

例 11. 例 5 における行列の階数を計算する。

$$\text{rank} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2 & -1 & 3 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix} = \text{rank} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -9 & -3 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix} = 3$$

$$\text{rank} \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} = \text{rank} \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} = 2$$

命題 12.  $m \times n$  行列  $A$  に対して、 $\text{rank}(A) \leq \min\{m, n\}$  である。

証明.  $A$  を簡約化した行列  $B$  も  $m \times n$  行列である。よって、

$$\text{rank}(A) = B \text{ の主成分を含む行の個数} \leq m$$

$$\text{rank}(A) = B \text{ の主成分を含む列の個数} \leq n$$

である。

□

簡約化を用いて、連立 1 次方程式を解く。まず、二つの例を考えてみる。

例 13. 次の連立 1 次方程式を解いてみる。

$$(1) \quad \begin{cases} x_1 & & -x_3 & & -2x_5 & = & 1 \\ & x_2 & +x_3 & & +x_5 & = & -2 \\ -x_1 & & +x_3 & +x_4 & +x_5 & = & 3 \\ 2x_1 & +x_2 & -x_3 & & -3x_5 & = & 1 \end{cases}$$

連立 1 次方程式の拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化する。

$$\begin{aligned}
 (A \mid \mathbf{b}) &= \left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & -2 \\ -1 & 0 & 1 & 1 & 1 & 3 \\ 2 & 1 & -1 & 0 & -3 & 1 \end{array} \right) \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -1 & 4 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & -1 \end{array} \right) \quad \begin{array}{l} \textcircled{3} + \textcircled{1} \\ \textcircled{4} + \textcircled{1} \times (-2) \end{array} \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & 0 & -1 & 0 & -2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -1 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{array} \right) \quad \textcircled{4} + \textcircled{2} \times (-1) \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} \textcolor{blue}{1} & 0 & -1 & 0 & -2 & 0 \\ 0 & \textcolor{blue}{1} & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \textcolor{blue}{1} & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \textcolor{blue}{1} \end{array} \right) \quad \begin{array}{l} \textcircled{1} + \textcircled{4} \times (-1) \\ \textcircled{2} + \textcircled{4} \times 2 \\ \textcircled{3} + \textcircled{4} \times (-4) \end{array}
 \end{aligned}$$

よって、連立 1 次方程式 (1) の解集合と次の連立 1 次方程式 (1') の解集合は等しい。

$$(1') \quad \left\{ \begin{array}{rclcl} x_1 & - & x_3 & - & 2x_5 & = & 0 \\ & & x_2 & + & x_3 & + & x_5 & = & 0 \\ & & & & x_4 & - & x_5 & = & 0 \\ & & & & & & 0 & = & 1 \end{array} \right.$$

しかし、 $0 \neq 1$  ため、連立 1 次方程式 (1') は、解を持たない。

**例 14.** 次の連立 1 次方程式を考えてみる。

$$(2) \quad \left\{ \begin{array}{rclclcl} x_1 & - & 2x_2 & & + & 3x_4 & & = & 2 \\ x_1 & - & 2x_2 & + & x_3 & + & 2x_4 & + & x_5 & = & 2 \\ 2x_1 & - & 4x_2 & + & x_3 & + & 5x_4 & + & 2x_5 & = & 5 \end{array} \right.$$

連立 1 次方程式の拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化する。

$$\begin{aligned}
 (A \mid \mathbf{b}) &= \left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 1 & -2 & 1 & 2 & 1 & 2 \\ 2 & -4 & 1 & 5 & 2 & 5 \end{array} \right) \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 2 & 1 \end{array} \right) & \begin{array}{l} \textcircled{2} + \textcircled{1} \times (-1) \\ \textcircled{3} + \textcircled{1} \times (-2) \end{array} \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \end{array} \right) & \textcircled{3} + \textcircled{2} \times (-1) \\
 &\left( \begin{array}{ccccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \end{array} \right) & \textcircled{2} + \textcircled{3} \times (-1)
 \end{aligned}$$

よって、連立 1 次方程式 (2) の解集合は、次の連立 1 次方程式 (2') の解集合と等しい。

$$(2') \quad \begin{cases} x_1 - 2x_2 + 3x_4 = 2 \\ x_3 - x_4 = -1 \\ x_5 = 1 \end{cases}$$

連立 1 次方程式 (2') は解を持ち、次のように表される。主成分を含まない列に対応する変数  $x_2, x_4$  の値を任意に定めると、主成分を含む列に対応する変数  $x_1, x_3, x_5$  は、一意的に決まる。すなわち、 $x_2 = c_1$  と  $x_4 = c_2$  とおくと、方程式 (2) の解集合は、次のように表される。

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 + 2c_1 - 3c_2 \\ c_1 \\ -1 + c_2 \\ c_2 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} + c_1 \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + c_2 \begin{pmatrix} -3 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (c_1, c_2 \in \mathbb{R})$$

**注 15.** 連立 1 次方程式 (1) において、その拡大係数行列を簡約化した行列の最も右の列は、主成分を含むため、解を持たない。連立 1 次方程式 (2) において、拡大係数行列を簡約化した行列の最も右の列は、主成分を含まないため、解を持つ。

**定理 16.** 連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  が解を持つ必要十分条件は、

$$\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) = \text{rank}(A)$$

である。

**証明.**  $A$  を  $m \times n$  行列とする。

まず、 $\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) = \text{rank}(A)$  を仮定し、 $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  が解を持つことを示す。 $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化した行列  $(C \mid \mathbf{d})$  の主成分を含む列と主成分を含まない列を、それぞれ  $j_1 < j_2 < \cdots < j_r$  と  $k_1 < k_2 < \cdots < k_{s+1}$  とする。このとき、 $r + s + 1 = n + 1$  である。 $\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) = \text{rank}(A)$  より、 $(C \mid \mathbf{d})$  の最も右の列  $\mathbf{d}$  は、主成分を含まないため、 $k_{s+1} = n + 1$  が分かる。さらに、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解集合と次の連立 1 次方程式の解集合は等しい。

$$\begin{cases} x_{j_1} = d_1 - c_{1,k_1}x_{k_1} - c_{1,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{1,k_s}x_{k_s} \\ x_{j_2} = d_2 - c_{2,k_1}x_{k_1} - c_{2,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{2,k_s}x_{k_s} \\ \vdots \\ x_{j_r} = d_r - c_{r,k_1}x_{k_1} - c_{r,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{r,k_s}x_{k_s} \end{cases}$$

よって、変数  $x_{k_1}, x_{k_2}, \dots, x_{k_s}$  の値を任意に定めると、変数  $x_{j_1}, x_{j_2}, \dots, x_{j_r}$  は、一意的に決まる。特に、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  は、解を持つことが分かる。

逆に、 $\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) \neq \text{rank}(A)$  のとき、拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化した行列  $(C \mid \mathbf{d})$  の最も右の列  $\mathbf{d}$  は、主成分を含むことが分かる。 $(C \mid \mathbf{d})$  の主成分を含む列と主成分を含まない列を、それぞれ  $j_1 < j_2 < \cdots < j_{r+1}$  と  $k_1 < k_2 < \cdots < k_s$  とすると、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解集合は、次の連立 1 次方程式の解集合と等しいことを得る。

$$\begin{cases} x_{j_1} = d_1 - c_{1,k_1}x_{k_1} - c_{1,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{1,k_s}x_{k_s} \\ x_{j_2} = d_2 - c_{2,k_1}x_{k_1} - c_{2,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{2,k_s}x_{k_s} \\ \vdots \\ x_{j_r} = d_r - c_{r,k_1}x_{k_1} - c_{r,k_2}x_{k_2} - \cdots - c_{r,k_s}x_{k_s} \\ 1 = 0 \end{cases}$$

しかし、この連立 1 次方程式は、解を持たないため、 $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  も解を持たないことが分かる。これで、定理を示した。 □

**補遺 17.**  $m$  個の方程式からなる  $n$  変数の連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  とその  $m \times (n+1)$  型の拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  において、

$$\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) = \text{rank}(A)$$

を仮定し、その階数を  $r$  とする。

(i)  $r = n$  のとき、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  は、ただ一つの解を持つ。

(i)  $r < n$  のとき、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解集合

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid A\mathbf{x} = \mathbf{b}\} \subset \mathbb{R}^n$$

は、 $n - r$  個のパラメーター  $c_1, c_2, \dots, c_{n-r}$  で表される。

**証明.** 拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化した行列を  $(C \mid \mathbf{d})$  とする。

(i) 仮定  $r = n$  より、 $C = E_n$  が分かる。従って、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解集合は、連立 1 次方程式  $E_n \mathbf{x} = \mathbf{d}$  の解集合と等しいため、 $\mathbf{x} = \mathbf{d}$  はただ一つの解であることが分かる。

(ii) 行列  $C$  の主成分を含まない列と対応する変数  $x_{k_1}, x_{k_2}, \dots, x_{k_{n-r}}$  の値を任意に定めると、主成分を含む列と対応する変数  $x_{j_1}, x_{j_2}, \dots, x_{j_r}$  は、一意的に決まる。  $\square$

**例 18.** 次の連立 1 次方程式を解いてみる。

$$\begin{cases} x_1 - 2x_2 & + 3x_4 = 3 \\ x_1 - x_2 + x_3 + 2x_4 = -2 \end{cases}$$

拡大係数行列  $(A \mid \mathbf{b})$  を簡約化する。

$$\begin{aligned} (A \mid \mathbf{b}) &= \left( \begin{array}{cccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 3 \\ 1 & -1 & 1 & 2 & -2 \end{array} \right) \\ &\left( \begin{array}{cccc|c} 1 & -2 & 0 & 3 & 3 \\ 0 & 1 & 1 & -1 & -5 \end{array} \right) && \textcircled{2} + \textcircled{1} \times (-1) \\ &\left( \begin{array}{cccc|c} 1 & 0 & 2 & 1 & -7 \\ 0 & 1 & 1 & -1 & -5 \end{array} \right) && \textcircled{1} + \textcircled{2} \times 2 \end{aligned}$$

これを見ると、 $\text{rank}(A \mid \mathbf{b}) = \text{rank}(A) = 2$  分かる。よって、補遺 17 の (ii) より、連立 1 次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解集合は、 $n - r = 4 - 2 = 2$  個のパラメーター  $c_1, c_2$  で表される。簡約化した拡大係数行列と対応する連立 1 次方程式は、次のように得られる。

$$\begin{cases} x_1 & + 2x_3 + x_4 = -7 \\ & x_2 + x_3 - x_4 = -5 \end{cases}$$

よって、解集合  $\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^4 \mid A\mathbf{x} = \mathbf{b}\}$  は、次のように表される。

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} -7 - 2c_1 - c_2 \\ -5 - c_1 + c_2 \\ c_1 \\ c_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -7 \\ -5 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + c_1 \begin{pmatrix} -2 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + c_2 \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \quad (c_1, c_2 \in \mathbb{R}^2)$$